

相談支援係
072-941-3365

情報チーム
072-943-5785

研究研修係
072-943-5784

教育センター
Web page は
こちらから



『そだちのねっこ』

～乳幼児期の遊びより～



【非認知能力の育ちは、笑顔いっぱいになるための『そだちのねっこ』
～子どもの欲求が満たされ、笑顔で過ごせるために、保育者ができることは～】

全学年の様子

1月30日（木）、0～5歳児の子どもたちが遊ぶ様子を見学してきました。

0歳児のクラスでは、自分の遊びたい玩具が手に取れる環境がありました。保育者の膝に座って絵本を見たり、安心できる保育者の存在を感じながら車を走らせたりしていました。保育室に入ると、人に興味を示したのか、近づいてきてタッチを求めてきました。安心できる空間にいるからこそ、『ちょっと気になる人・もの』に自ら近づき、『どんな人？どんなもの？』を確かめてみようとしているのだと思いました。まさに、安心の基地から一歩外の世界へ出てみようとする気持ちの育ちを感じました。



1歳児のクラスでは、違う遊びをしながらも、大好きな音楽が鳴ると、体を動かしたり、手でリズムをとったりして楽しんでいました。「みててや！」と自分のしていることを見てもらい、「できたね！」「楽しいね」と認められたり、共感されたりすると安心して、再び遊び始める姿がありました。見たり聞いたり触ったり匂ったり、五感を使って色々な遊びや経験を通して、体得していると思いました。また、感じたことを『伝えたい』気持ちも大きくなり、それに応答する保育者の存在があることで、語彙数も増えていると感じました。

2歳児のクラスでは、保育室のコーナーを活用して、おうちごっこを楽しんでいました。「これも洗っとこ！」「まだ汚れたね～」と、会話をしながら保育者の手作り洗濯機にタオルを入れたり、干したりしていました。生活と遊びとのつながりをもつことで、想像力が豊かになったり会話が aumentarsi もします。また、人形の髪の毛をとくしたり、聴診器を当てて「大丈夫よ～」と声をかけたりして遊んでいました。自分がしてもらって嬉しかったことが再現でき、一人ひとりのやりたい遊びが保障されていました。時々、近くにいる友だちと「おんなじ～」と笑い合う子どもの姿も印象的でした。





3歳児のクラスでは、好きな音楽が鳴ると、なりきりアイテムを付けて、踊ったりヒーローになりきったりしてステージごっこを楽しんでいました。保育室の中央には、いつでも誰でも運転でき、たくさん乗れる大型バス（車）がありました。車にはハンドルを掛ける場所があり、ものを大事にする、片づけやすい環境も工夫されていました。「次はどこに行く？」と保育者に聞かれると、「鬼退治！」と力強く答え、車から降りて鬼退治へ向かっていきました。自分のしたい遊びをしながら、友だちのしている遊びにも関心をもつようになってきていると思いました。遊びと遊びがつながり、友だち同士のかかわりも増えていくきっかけになっていることがわかりました。



4歳児のクラスでは、色々な素材を使って、遊びに必要なものを作って遊べる環境がありました。1人で集中していたり、友だちと一緒に「こっちとつなげる？」「この色の方がよくない？」など会話したりして遊んでいました。保育者が「何、作ってるの？」と聞くと、「宝石作ってるねん」、「僕はな、虫作ってるねんで！」とすぐに答えていました。「すごいね！こんなに細かくできたんだね。本物みたいだ！」と声をかけられると、さらに自信満々の表情を見せ、再び作ることに集中していました。周りの人に認められることで、自信になり、『得意』が増えていくことがわかりました。好きな遊びを充分できる時間や環境が

あることで、子どもの意欲と発想力、クオリティーが高まると同時に、手先の器用さ、技術力も必然的に身に付くと思いました。

5歳児のクラスでは、「あれっ？」「なんで？」など、気になったことを何でも調べてみようということで、それを『研究』と名付けて遊んでいました。自ら調べたり、比べたり、試したりできるような素材や図鑑などもあり、子どもたちが真剣に取り組んでいる姿は『研究者』そのものであると思いました。そして、そのことを友だちや保育者に伝える『研究発表』も大変興味深かったです。「やりたいことをとことんできる環境」と、「やったことを認めてもらえる友だちや保育者の存在」があることで、ここまで集中して楽しめるんだと思いました。



また、駄菓子屋さんでは、突然のお客さんに対して、「こちらはくじ引きになっています。白が当たりで、ラムネが2つもらえます」と丁寧に説明をし、生き生きとした姿でやりとりを楽しむ子どもたちがいました。

【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】の『社会生活との関わり』『言葉による伝え合い』『数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚』『豊かな感性と表現』などにつながる育ちがたくさん見られました。



それぞれの学年の育ちが引継がれ、積み重なっていることがわかりました。幼児教育では、子どもたちの“やりたい”意欲を大切にすると同時に、子どもたちの思いを実現できるように“ねらい”をもって環境を構成し、保育者の援助が重要になります。『こんな子どもに育ってほしい』という思いをもちながら、「やらせなければ…」ではなく、「どうしたら楽しめるかな？」「どうしたらやる気になるかな？」を常に考え、子どもの姿に応じた保育内容を実践し、育ちにつなげていくことが幼児教育の基本となります。その中で育まれる非認知能力（自己肯

定感、意欲、持続力、協調性、創造力、失敗しても諦めない力など）が、認知能力の土台となることも研究報告されています。

安心できる環境のもと、自分に自信をもてることで、周りの“ひと・もの・こと”を大事にできる気持ちも育っていきます。子どもたちの『笑顔』は、意欲や学びの芽生えにつながる一歩だと思います。

小学校以降で進められている教育において、『環境を通して行う教育・保育』＝『遊びは学び・学びは遊び・やってみたいが学びの芽』である、幼児教育の基本的な考え方を取り入れた教育実践につながることを期待しています。

これからも、乳幼児期の遊びのエピソードを、『そだちのねっこ』を通して発信していきます。



通級指導教室担当者実践報告会①

令和7年2月3日（月）午後3時～午後5時に通級指導教室担当者実践報告会①を行いました。講師は発達支援ルームまなび 今村 佐智子 理事で、八尾市立小学校の実践報告について、参加者のグループ討議と講師による指導・講評をいただきました。

＜受講者感想＞

- ・こども園に勤務していて、通級指導教室のことについて知らないことが多かった。実際の様子を見ることができて良かった。一人ひとりに合わせて個別の指導はこども園にも通じるところも多かったので参考になった。吃音の子は園にもいたことがあったが、小学校に行っても通級があることでその子に合わせた授業の形があることを知り少し安心しました。
 - ・歴史ある「ことばの教室」から引き継いでいる専門的な内容を知ることができた。初めて聞いた言葉もあったが、自校でも、ぜひやってみたいスキルトレーニングもあった。
 - ・今村先生の話聞いて、アセスメントの重要性と、指導内容や目標設定に確かな根拠が必要だということに納得が得られた。また、通級の終了や保護者への働きかけ、引継ぎについてなど、判断に悩むような内容についても有益な示唆を得ることができた。
- グループ交流は、時間が足りなかったが、そんな中でも、他校の通級の様子を知ることができたのはよかった。

幼・保・こ・小合同研修会④

【非認知能力】

難しいことにも挑戦する、粘り強くやり遂げようとする、友達と協力しながら頑張る、といった心情や意欲や態度で表される学びに向かう力。

非認知能力は幼児期に大きく育まれる力。3歳児～4歳児にかけて、ぐんぐん伸び始める。

非認知能力の名前	具体的な非認知能力
自己認識	やり抜く力、子供が自分の能力を信じる。自己肯定感がある
動機付け・意欲	学習志向、やる気がある、集中力
持続力・忍耐力	あきらめない、粘り強い
自制心	自分のルールを守る。自制心がある。勤勉
メタ認知	目標を決めて計画を立て、問題を把握・解決しながら前に進められる。客観性
社会的能力	リーダーシップ、他の人と対話・協調性
回復力・対応力	楽天的、失敗しても悩まない、失敗から学べる
クリエイティビティー	創造力・直感力がある、工夫できる

非認知能力を解説～幼児期の教育が40歳で優位な差を生む。子どもがより豊かな人生を過ごすためにノリ、ママが知っておきたいこと
https://www.yamanashibank.co.jp/fuji_note/life/post_1406.html

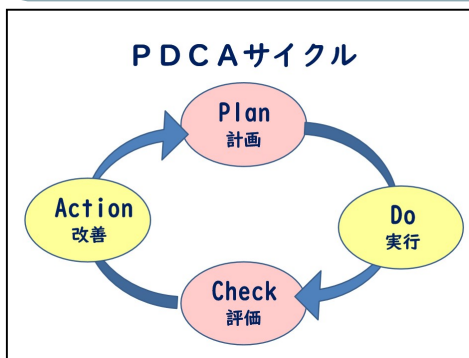
令和7年2月7日（金）午後3時30分～午後5時に幼・保・こ・小合同研修会④を八尾市立青少年センター3階集会室で行いました。講師は大阪総合保育大学 東城 大輔 准教授で、研修テーマは「子どもを中心にした連携の大切さについて―実践交流を経て、子どもの学びをつなぐには―」です。

←研修使用資料

<受講者感想>

- ・「本当の子ども主体の教育ができていないのではないか？」という意見がグループ内で出た。何かと制限が多い中で、子どもが伸び伸びと考え、行動できる環境を作ることが保育者・教師の仕事だと思う。
- ・小学校に入学してくるまでに、子どもたちがどんな経験をしているのかもっと知るべきだと思った。授業があり時間を融通することは難しいが、できるだけ実際の保育の場面を見ながら学んでいきたい。
- ・先入観や思い込みのバイアスにとらわれず、「本当はどうか」ということを考え、客観的に検証することを怠ってはならないと思った。
- ・目に見えることだけではなく、心の動き（思いやり、自分を信じる力等）がよく見られることが、この仕事の楽しさだと感じている。今は形にならないが、将来社会に出た時に「後伸びする力」が「本人の力」になっていてほしいと思う。

初任者研修⑯・新規採用養護教諭⑫・新規採用事務職員研修⑫



令和7年2月13日（木）午後3時～午後5時に初任者研修⑯・新規採用養護教諭⑫・新規採用事務職員研修⑫を行いました。研修講師は本センター 吉田 光秀 指導主事と澤田 玲子 指導員です。研修テーマは「一「1年間のわたし」を振り返る 児童生徒理解を深めるために2一」です。研修終了後、初任者研修の閉講式を行いました。

←研修使用資料

<受講者感想>

- ・子どもたちの実態を把握したり、顔を思い浮かべたりしながら授業を考え、実践することができるようになってきたように思う。私がそう思ったきっかけは、初任者代表授業である。多くの先生方の力を借りながら、1つの単元にこれだけ丁寧に向き合い、授業をつくったり見てもらったりする機会をこの時期にもてたことは、本当にいい経験と学びにつながった。それまでは決められた内容をこなすことに精いっぱいであったが、様々な助言をいただき、今日の前にいる子どもたちと創り上げる授業の楽しさに気づくことができたと感じている。この気持ちを忘れず、引き続き学んでいきたい。
- ・初任者として一年間勤めたが、一学期が終わるころには講師の時とは違って責任がすごく重くなったことを自覚した。授業や校務分掌など、自分ができていると思っていたことが実はできていなくて、それでも先輩方にたくさん助けられながら、何とか乗り切ることができた。
- ・2年目は、より一層児童の特性を深く理解し、一人ひとりに寄り添いながら成長を支えられる教員をめざしていきたい。どの児童も自分らしく過ごせる教室の雰囲気大切に、安心してチャレンジしたり、自信をもって学習や生活に向かえたりする環境を作ろうと思う。また、1年目で学んだ自己管理の大切さをもとに、ミスを減らすだけでなく、先を見通した指導ができるよう、記録や振り返りを定期的に行えるようにしたい。
- ・来年度はグループ学習での課題について取り組んでいきたい。また今年度はタブレットの活用にも力を入れたが、まだまだ効果的な活用方法が見出せていないので、その点についても来年度取り組んでいきたい。この1年間は多くの場面で補助的な立ち位置で分掌などをこなしてきたが、来年度からは主体的な動きも意識していきたいと思う。今年度初任者研修を通して自分の教育に関する知識不足なところを痛感した。現場で子どもたちと関わるなかで、しっかり学びながら、成長していきたいと思う。

ICT 担当者会③

持ち帰りの際の注意

- ①登下校中に端末やACアダプタをかばんから出さない。
- ②学校での使用時と同様に、丁寧に扱う。
- ③学習以外の用途では使用しない。
- ④就寝の30分前以降は使わない。
- ⑤学校や家庭のルールを守って使用する。



研修資料の一部 ↑

令和7年2月18日（火）午後3時30分～午後5時に ICT 担当者会③をオンライン web で行いました。講師は本センター 生田 祐敬 指導主事と本市 ICT 支援員です。研修テーマは「ICT 機器・ソフトウェアの管理および運用方法について」（生田）と「情報モラル教育の重要性について」（支援員）、「児童生徒用端末の扱いと使用時の注意事項について」（生田）です。

<受講者感想>

- ・今年度は情報教育の授業を4回実施した。スマートフォンの保有率が90%を超えているので、SNS やマナーを中心に行った。ICT 支援員と協力して教材づくりをしている。そのせいか、SNS を介したトラブルは激減した。継続的にやっていくことが大切であると感じている。
- ・授業中に生徒からタブレット端末の不具合を訴えられたとき、その場では何もできなかったことがあった。様々なトラブルに対する対策を知っておけば授業の進行も妨げられることも少なくなると思う。職員間でトラブル対策を共有することが、チームとして取り組む一つのきっかけにもなると思った。
- ・タブレットは、児童のものではなく、借りているものであるということをしっかり伝え、紛失や破損ができるだけないように指導していきたい。万が一、破損や紛失をしてしまったときは、事後指導として、そのようになってしまった原因を振り返り、対策を一緒に考えていくことも大切だということが分かった。

通級指導教室担当者実践報告会②

令和7年2月21日（金）午後3時～午後5時に通級指導教室担当者実践報告会②を行いました。講師は発達支援ルームまなび 今村 佐智子 理事で、八尾市内の中学校の実践報告について、参加者のグループ討議と講師による指導・講評をいただきました。

<受講者感想>

- ・通級指導教室に長く携わってこられた先生の報告で、多くの点で勉強になった。特に教材については、自分自身も気になっていた部分であり、すぐに通級指導教室の業務に生かせると感じた。また、教室の中にパーテーションを作る方法は、自校での通級指導教室にも取り入れてみたい。
- ・一年間を通して、自分なりに考えてきたことを整理できた。通級指導や通級指導教室担当の仕事について、理解が深まった。職員や保護者との情報共有は積極的に行ってきたが、全校生徒に向けてのアナウンスまではできていないので、今後積極的に行っていきたい。
- ・グループ討議では、小学校と中学校、また中学校と高校の引継ぎのことなどについて話した。中学校から高校への連携については、あまり聞いたことがなかったので、良い機会になったと思う。年度替わりには校内でも通級指導教室担当者間の引き継ぎを丁寧に行っていきたい。
- ・通級指導教室へ抜ける授業について、得意だから抜けても大丈夫という考え方と、苦手だからこそ教室で行うべき、という二つの考え方があることを知った。苦手を補う方に目が行ってしまいうけれど、通級は得意を伸ばす場でもあるので、得意な教科を使って一緒に学習してもいいと思った。教材もたくさん紹介していただき、ぜひ使ってみてみたいと思った。

教育センター「情報公開コーナー」

教育センターB棟（東側）の2階に「情報公開コーナー」があります。各種教育関係図書・雑誌等を配架しています。もちろん「教科書センター」として八尾市で採択している教科書や他社の教科書もあります。研修等で来所された時に直接ご覧いただければ幸いです。教科書・その他書籍・雑誌等も2週間の貸し出しを行っております。今回は2月から3月に配架した雑誌の誌名と目次の一部を紹介いたします。

「こころの科学」（日本評論社）3月号 創刊40周年記念増大号

- ・ 特別企画 みんなで考えた統合失調症の未来

「月刊学校教育相談」（ほんの森出版）3月号

- ・ 特集1 卒業を迎える不登校の子に贈る言葉
- ・ 特集2 相談・連絡が頻回な保護者

「指導と評価」（日本教育評価研究会）3月号

- ・ 特集1 生成 AI の活用

さすがに「私は生成 AI の活用に反対です。」という声は少なくなりました。それだけ生成 AI が浸透したとも考えられます。時代の流れに抗って声をあげられなくなっているのかもしれませんが、私にはそう感じられます。昨年（令和6年）12月に暫定版「初等中等教育段階における生成 AI の利活用に関するガイドライン」（ver.2.0）として改訂・公表されました。このタイミングで、この特集が組まれるのはタイムリーです。

巻頭言で東京家政大学の 平山 祐一郎 教授は「とりあえず、何をなすべきか」という文章の中で次の4点をあげておられます。①しっかりと読解力、②ほどよく緊張感を維持する批判的思考力、③問いを練り上げる力、④巨人の肩の上に立つ文章力です。①について「読解方略」を用いた指導の必要性を述べておられます。②については「批判的思考力」の必要性を述べておられます。③については「グループワーク」で問いを深めることを述べておられます。④については生成 AI の出力（過去の情報や知識をもとに出力）を「巨人」にたとえ、その肩に立って（高い視点で）それを超えて、「自分なりの言葉と自分ならではの考えでその学びを表現」することの必要性を述べておられます。①～③は生成 AI の話ではなくても大事なことです。④は生成 AI を使用した時の、特有の課題ではないのでしょうか。そんな簡単に「巨人の肩」にのれるのでしょうか。まして、そこを超えていくことが可能なのでしょうか。

さてここから、小中学校における生成 AI の活用について、紹介させていただきます。最初は小学校です。「小学校における生成 AI 活用—どのような授業を目指すべきか—」と題して東京学芸大学付属小金井小学校の 鈴木 秀樹 教諭が執筆されています。鈴木先生はガイドラインを改定した「初等中等教育段階における生成 AI の利活用に関する検討会議」の委員をされています。ポイントは3点です。①小学校特有の難しさ、②教科の目的達成に生成 AI が寄与するためには、③「不適切」は何が不適切か、です。①について小学生に生成 AI の仕組みを理解させることが難しいことと、小学校のカリキュラムの中で、生成 AI について教えることを目的とした授業を実施する時間はないということが述べられています。時間については既存の教科の中で生成 AI を効果的に使っていくほかない。また、生成 AI の仕組みを体験的に教えていくことが必要だそうです。しかし、一部の生成 AI を除いて利用規約で13歳未満の利用を認めていないそうです。ということは、教師が生成 AI を操作して行う授業が考えられます。鈴木先生は、子どもとともにプロンプトを考えて、生成 AI の作った文章を提示し、それに対する子どもの「違和感」を検討し、目的に迫っていくという実践を紹介しておられます。数は少ないですが、小学生が使えるものもあります。ここでは、児童が作ったプロンプトに対して、生成 AI の回答に納得がいかない場合もあり、

それを生かして授業を構成した、という実践を紹介されています。④については、生成 AI の利用が「不適切」とする批判の「不適切」さを考えるべきとの論調です。「児童が生成 AI の特徴について理解し、冷静な態度で接している」のであれば「教師に相談する前に生成 AI に相談する」ということがあっていいのではないかと主張です。

次に中学校です。「個別最適な生成 AI 活用と生成 AI との協働的な学び—中学校における取組—」と題して久喜市立鷺宮西中学校 青木 真一 校長が執筆されています。鷺宮西中学校は令和 6 年度に文部科学省リーディング DX スクール事業指定校・生成 AI パイロット校に指定されています。青木校長が中心となって、生徒・教師さらには企業も協力して研究を推進してられました。基本的な方針としては「リスクを過度に恐れるか、十分な準備なしに活用を進めるか」という両極端な考えを避け、生徒も教員も、まずは使ってみるということを大切にされています。「必要最小限」の注意すべきことは次の三つです。①個人情報や重要な情報は生成 AI に入力しない、②生成 AI からの回答はそのまま使わない、③生成 AI からの回答を鵜呑みにしない、です。生成 AI と授業に関係は「排除・分離でもなければ、結合・統合でもなく、「包摂」が個別最適なのではないかと考える。」とのこと。生成 AI は発展途上です。回答の精度はどんどん向上しています。その結果、使用者が検証する必要性も低下してくるのではないのでしょうか。「心配しなくても生成 AI だから大丈夫」という時代が来るかもしれません。その時、我々人間は「批判的に吟味する能力」を持ち続けることができるのでしょうか。それだけが心配です。

※プロンプト：生成 AI の領域では、AI に対して与える「指示や質問」を指します。

(葭仲)



初等中等教育段階における生成 AI の利活用に関するガイドライン(Ver. 2.0)【概要】
(文部科学省)



初等中等教育段階における生成 AI の利活用に関するガイドライン(Ver. 2.0) (文部科学省)

・特集 2 通級による指導

「道徳教育」(明治図書) 3月号

・特集 道徳授業者のための**必読**ブックガイド105

道徳にまつわる本がたくさん紹介されています。巻頭に「忙しい先生にも伝えたい読書術」と題して 西岡 壺誠 さんが執筆されています。西岡さんは 2 浪の後に「独学術」を開発して東京大学に合格したことで有名です。西岡さんは読書について「「つまみ食い」的に本を読んででもいいということを声を大にして伝えたいと思う。」と言っておられます。しかも「なるほど」と感心しながら読むのではなく「そうそう」と大雑把に読むのでいいのではないかと、とも言われています。そう言われてみると、「せっかく読むんだから、しっかり元をとるいう」などと考えてしまうことがあります。西岡さんが仰るように、本を一冊読んだくらいで何かを分かったように思うのは「傲慢」なのかも知れません。

ということで、道徳にまつわる 105 冊の本が紹介されています。私にとってはほとんどが「初めまして」の本ばかりですが、数冊だけ読んだことがある本がありました。その中の

一冊が『J-POP で創る中学校道徳授業3』（柴田克著、明治図書）です。紹介されているのは千葉県千葉市寒川小学校の 石井 裕起 教諭です。特別の教科 道徳は市町村単位で採択された教科書があって、これを使用しなくてはなりません。ただ、内容項目に照らして適切な教材があれば部分的に使用することができます。子どもたちにとって聞き馴染んだ J-POP は親しみを覚えるのではないのでしょうか。好きな歌は、何度聞いても何度歌っても飽きることがありません。その時々心の状況によって、道徳的理解が深まります。私の「推し」は back number です。どの曲も道徳教材の要素を持っているように感じますが、「黒い猫の歌」「幸せ」「水平線」などは秀逸だと私は思っています。

とはいえ、歌を聞いて考えるのは受け身です。自分の言葉、自分たちの言葉で歌を作って道徳的価値をかみしめてみようという試みがあります。同じ「道徳教育」の中で、「1人1台端末活用ミニハック」という連載記事（最終回）で、愛知県弥富市立十四山東部小学校の鈴木 賢一 先生が執筆されています。タイトルは「Suno AI で道徳の振り返りソングを作ろう」です。個人だけでなく、クラス全体の振り返りを集約して Chat GPT など生成 AI で歌詞化しものに簡単にメロディーをつけることができます。鈴木教諭が実際に子どもたちと作られた曲を左の QR コードから聞くことができるそうです。短いものなら無料版でも作成できるそうです。実際のご利用は説明等を熟読の上、自己責任で行ってください。

（葭仲）

「こころの科学」（日本評論社）3月号

- ・特集 みんなで考えた統合失調症の未来

「特別支援教育研究」（全日本特別支援教育連盟編集・東洋館出版社）3月号

- ・特集 新年度に向けて知っておきたい、特別支援教育コーディネーターの仕事術

「初等教育資料」（文部科学省編集・東洋館出版社）3月号

- ・特集Ⅰ 学級経営の充実
- ・特集Ⅱ [家庭]家庭科における問題解決的な学習の授業づくり

「中等教育資料」（文部科学省編集・学事出版）3月号

- ・特集 学校教育における文化芸術教育の充実

教育科学「国語教育」（明治図書）3月号

- ・特集 国語授業 ツール&アイテム100（使わずにいけない）

教育科学「社会科教育」（明治図書）3月号

- ・特集 当事者意識を育てる！ 主体性を引き出す授業デザイン